

# エスペラントの子音群について \*

## On Esperanto consonant clusters

千田俊太郎  
TIDA Syuntarô

キーワード: エスペラント、音韻論、子音群、音節  
Keywords: Esperanto, phonology, consonant clusters, syllable

**要旨** 本論文ではエスペラントの子音群について論じる。特に初頭音に比べて従来不十分であつた末音に注目し、音節初頭・末尾にわたる音の並びのパタンの規則性について指摘する。複合語に注目した調査を行なひ、v の音節内での位置は鼻音に近いことを論じる。

### 1 はじめに

エスペラントの音韻論は、それほどさかんに議論されてきた分野とはいへないが、音節構造については van Oostendorp (1999) と Bavant (2006a, b) が注目に値する資料を示し、議論を展開してゐる。両者が対照的なのは、van Oostendorp (1999) が典型的な音節を主たる対象としてをり可能な音節構造の認め方が抑制的であるのに對し、Bavant (2006b) が辞書 (PIV 2002\*<sup>1</sup>) に立項された形式を廣くエスペラントの音節構造の考察に取り入れる方針をとる點である。卑見では、どちらも少々極端な立場を代表してゐる。例へば、van Oostendorp (1999) は、エスペラントの韻が原則として「最大二つの分節音を含む」、つまり音節に必須の母音に續く末子音は原則として最大一つといふ立場を取るが、彼自身が認めるやうに、非常に基礎的な語彙・語形の中に、二つの末子音をもつものが多く存在する(例: 複數對格形語尾 -ojn (名詞), -ajn (形容詞), -ujn (相關連體詞)、前置詞 post 「~の後で」, trans 「~の向かふで/に」、數詞 cent 「百」)。第二の子音は音節外に置く分析である。一方で、Bavant (2006b) は PIV の見出しとしてたつた一語づつ認められる語頭の tl (tlaspo 「軍配齊屬」)、kt (ktenoforoj 「有櫛動物」)などを二子音の初頭音として認めてゐるが、その道の専門家でなければ知らない用語であつて、比較的大きな辞典の見出しとして一回きりしか現れない音形を集めた上、「音配列規則がない」といふ結論に至るのは、分析として、あきらめが良すぎるやうにも感じられる。そして、見逃されてきたやうにも思はれる傾向や觀點について、まだ一言を加へる餘地があるやうにも思はれる。

エスペラントの音素と表記について、簡単にまとめておく。

- (1) a. 子音音素 23: /p, b, m, f, v, ŭ, t, d, n, s, z, ts, r, l, ŝ, ʒ, tʃ, dʒ, j, k, g, x, h/  
b. 母音音素 5: /a, e, i, o, u/

\* 本稿の一部は JSPS 科研費 18K00533, 19KK0012, 23K00538 の成果を含む。

\*<sup>1</sup> Plena Ilustrita Vortaro といふ名稱のエスペラント語大辭典。Bavant (2006b) は 2002 版を参照してゐる。執筆時點で 2020 年版がインターネット公開されてをり (<https://vortaro.net/>)、本稿執筆にあつては 2020 版を参照してゐる。以下略稱 PIV を使用する。

c. 表記: c /ts/, ê /tʃ/, ĝ /dʒ/, ĥ /x/, ĵ /ʒ/, š /ʃ/, ü /ʁ/

音素 /j/ や /ü/ は二重母音の一部をなすとも考へられるが、本稿は子音や母音といった分類に先立つ分節音の分布について論じるものであり、便宜的に子音と呼んで取り扱ふ。以下、第2節では頭子音、第3節では語中と語末の子音群、第4節では末子音の體系と介音の下位分類、第5節で音節末の子音群の例示を行なふ。第6節は結語である。

## 2 頭子音

van Oostendorp (1999) は主として音節初頭音の並び順について論じるものであるが、二子音からなる初頭の子音群を例示した後、次のソノリティー (聞こえ度) の相対差を定義してゐる。

(2) 母音            わたり音   流音   鼻音   障害音  
a, e, i, o, u   j, ü v(?)   l, r   m, n   p, b, t, d, k, g, f, v(?), s, z, c, dz, ê, ĝ, š, ĵ

言ふまでもなく、左がソノリティーの大きい部類、右がソノリティーの小さい部類である。ここで、ソノリティーの定義は音聲・音韻的な根拠を示して結論として提示されるものではない。上の分節音の分類が直接示されてゐる。おそらくは本論で論じられる事実を根拠の一部としながら一般論と矛盾のない階層をひとまづ示したものであらう。筆者は、ソノリティーの議論の實態は、個別言語の音韻的事実をむしろ根拠として、音聲的な對應物を探すといふ形で行なはれてきたものではないかと考へる。さうであれば、一般論としていきなりソノリティーを「定義」するのではなく、初頭に見られる子音群における子音の並び順、分布によつて、子音を実証的に分類する行き方がまづあつて然るべきではなかつたか。van Oostendorp (1999) の論の運びは、ソノリティーの定義のあと、ほとんどこの運用方法や、例外の扱ひに終始してゐる。そして、研究対象から外される「例外」はかなり多い。

エスペラントの音節初頭に見られる子音群のうち、頻度の高いものを説明するためには、わたり音、流音、鼻音の區別を一旦やめてみた上で分布を確認した方が分かりやすい。ひとまづは、三子音連続のはじめに見られる S 類 (ss) のほか、障害音 (gbdzĝjĵkpfthĥĉ)、共鳴音類 (rlvnmjü) の三類に分ければ十分であらう。障害音より内側 (母音側) には共鳴音類のほか s も現はれるので、これを音節内の位置と考へ、この位置に生起する子音については、音韻特徴に言及しない名稱「介音」と呼ぶことにする。障害音を有聲音 (G) と無聲音 (K) とに分け、共鳴音類に s を加へて介音類 W とした上で、介音別に初頭音を整理すれば表1のやうに見通しがよくなる。

表1の一段目と二段目は介音0で、GW, KW SW の下には単子音 (G, K, S) が並びあつてゐる。介音0の段の SKW も同様に、實質的には SK を構成する S の要素と、次に來られる K 類の分節音を示してある。初頭に現はれる単子音のうち、zĝjhĥ の計五つは他の子音と一緒に頭子音群を構成することがほぼない。「ほぼ」ない、といふのは、定着してゐないと考へられる外來音などを排除してゐるからである。

S 類の子音に後續する子音が s と š で異なるので一段目と二段目に分けてある。三段目の r 以降は、介音が存在する場合の初頭子音群である。SW の r の段に š r とあるのは初頭

表1 エスペラントの主要な音節初頭音 (第一案)

W	G	W	K	W	S	W	S	K	W	W	W
0	gbdzĝj		kpftchĥĉ		s		s	kptfc			
					ŝ		ŝ	kpt			
r	gbd	r	kpft	r	ŝ	r	sŝ	kpt	r	v	r
l	gb	l	kpft	l	sŝ	l	s	kp	l		
v	g	v	k	v	sŝ	v	s	k	v		
n	g	n	kp	n	sŝ	n					
j			fĉ...	j						mnv	j
m					sŝ	m					
s			kp	s							
(ŭ)			(k	ŭ)							

に ŝr- (例: ŝranko 「戸棚」) が見られることを示してある。sr- はその出現が極めて稀なので ŝ の隣に s を併記してある。稀にしか現はれないといつても、van Oostendorp (1999) が初頭の sr について、“not attested” とするのは、言ひ過ぎである。PIV には Srilanko 「スリランカ」が見出しにある。PIV には Srilanko 以外に語頭音 sr は見当たらないが、コーパスでは Srebrenica などの地名などが僅かに確認できる。しかし、このやうに地名・人名のみで見られる音連続は、「外來音」の近似表記であつて、発音できない話者があつてもをかしくない。このやうに、表に示されてゐない子音群は筆者が排除したことがある。

表1 から明らかなやうに、初頭音は三類の子音が C1-C2-C3 と順序よく並ぶのが最大で、固定のロットに任意に各類所屬の分節音が宛てがはれる。ロットは全て埋める必要がない。これに当たらない子音群は介音が並ぶ WW のタイプのみである。s の所屬が S, W にわたるので、S, K, G, W は排他的な分類ではない。

- (3) a. C1: S 類  
 b. C2: 阻害音 (無聲: K, 有聲: G)  
 c. C3: 介音類 (W)

分節音の現はれ方を一つずつ検討すると、ソノリティーを見るだけでは分からない、子音別の、他の子音との組み合わせはせられやすさも見えてくる。多くの種類の子音と組み合わせられる場合を「分布が広い」として不等號で目安を示せば次の通りである。

- (4) 初頭子音群を構成する際の分布の廣さ  
 a. 無聲阻害音 (K): k > p > t, f > c > その他  
 b. 有聲阻害音 (G): g > b > d > その他  
 c. 介音 (W): r > l > v > n > j > m, s

d. S類音: s > š

介音類は單獨で音節初頭音を構成できる。ただし、ü のみは、散發的に外來語表記に現はれたりオノマトペ・間投詞 ūa の表記に用ゐられる程度である\*2。確實にエスペラントの要素として認めるべき形式として、この字の名前 (üo) があるが、これは子音字母に機械的に -o をつけて作った名稱である。朝鮮語で字母 <c>, <h> を <ciuc>, <hiuh> と機械的に名付けることを想ひ起こさせる。名詞にありえない基底の末音 <c> や <h> はそのまま發音されることはない。これらの表層の現はれ方を説明できる基底形は //cius//, //hius// である。しかし、エスペラントの <üo> [üo] は <vo> [vo] (それぞれ ü, v の名稱) と區別しなければならぬので、苦手な人でも頑張つて發音しわけらう。同様に、kü の組み合わせもオノマトペ küaks (蟄蛙の鳴き聲) に用ゐられる程度であり、ザメンホフの用例があるにしても、周邊的なものと考へざるを得ない。

頻度の低い組み合わせをどこまで拾ふべきかといふ問題は、頻度といふ相對的な尺度を取る限り、最終的には恣意的に解決することになる。van Oostendorp (1999) も Bavant (2006b) も辭書の見出しを相手にしてをり、Bavant (2006b) は辭書の見出しに見られる頻度を考慮してゐる。本稿ではコーパス (Tekstaro 2024-03-01 版) における出現頻度を勘案した。語頭の ps は、確實なエスペラントの初頭子音群と言へる śl (ślosi 「鍵を掛ける」、ślimo 「泥」) や śp (śpari 「節約する」) よりも出現頻度が高い。

語頭の ks は ps に比べて、その十分の一程度しか現はれないが、それでも štr (štrumpo 「靴下」) のやうな基本的な語彙に見られる子音群よりやや多めに現はれる。ところが、van Oostendorp (1999) は ps や ks を註内でしか言及せず、śl, śp, štr は本文に取り上げてゐる。公平な扱ひではないのではないか。

表に示さなかつた組み合わせのうち kt (ktenoforoj 「有櫛動物」) や kš (kšatrio 「クシャトリヤ」)、pt (pterido 「井之許草」)、pš (pšento 「プスケント (ファラオの装身具)」) などに對應するには介音類に t や š を取り入れることになりさうである。かうした「例外的」な音形も、説明できるにこしたことはないが、一般語彙と層を異にするものとして、別に取り扱ふこともできるやうに思はれる。専門用語や固有名に限られて分布するやうな音列は、エスペラントにおいて周邊的なものだとする Brent (1973) は、周邊的な語幹初頭の子音群の例として pn-, vr-, gn-, pt-, ks-, ps-, mj-, nj-, fj-, vj- 等々を擧げてゐる。

表に WW として示した vr-, nj- については、周邊的であつても、一般語彙に出現するので、本稿でいふ介音類が重出する子音群である點を説明することを試みたいと思ふ。van Oostendorp (1999) も初頭子音群 vr- と ĉj-, nj- に對しては一定の言及ないし考察を行なつてゐる。vr- は極めて出現頻度の低い vrako 「難破船、大破した車輛」や vringi 「絞る」のほか、地名・人名や臨時の借用に現はれる。van Oostendorp (1999) は最終的には v が阻害音であると考へ、kv-, gv- などの組み合わせは kn-, gn- の存在とともに、軟口蓋破裂音の示す例外的な振る舞ひだとし、自身の論考に残された課題であることを認めてゐる。

そもそも、j の關はる初頭の子音連続が周邊的と言はれる所以であるが、Kioto 「京都」、Tokio 「東京」などの語形にも明らかなやうに、初頭で子音に j が後續する音形が嫌はれ

\*2 ūato 「ワット」といふ形式があるが PIV では空見出しになつてをり vato の形式に送られてゐる。

る様子が借用語の音形からも見て取れる。ところが、同じ軟口蓋音始まりでも、Kjongjuo 「慶州 (キョンジュ)」は辞書の見出しに擧がつてゐるし、Bjalistoko 「ビャウイストク」、vjetnama 「ベトナムの」、Pjongjango 「平壤」などの地名 (あるいは地名由来の語彙) の中には子音に j が後続する綴りが定着してゐるものもある。そして、規範的には綴り字通りに発音することになつてゐる。しかし、固有名を除いた一般語彙の中には mjelo 「脊髓」、fjordo 「フィヨルド」など、若干堅い内容を持つものに子音 + j が見られる程度である。Brent (1973) は、mielo 「蜜」と mjelo 「脊髓」の區別は実際のものといふより文字上のものだといふ。どこまでが典型的な初頭子音群と捉えられるか、難しいところである。どこからが専門用語なのか、この判定も容易ではない。

子音群への参加しやすさから表を見た場合にも、W=j の場合の傾向が他とは異なる。例へば介音類と結び付きやすいのは k だが、kj- については上記のやうな地名以外に確實な例がない。また、ç は他の介音類が後続することはほぼないが、çj- はすぐ後に述べる通り、初頭子音群と認めるに値する候補が存在する。子音 + j は特殊な結合なのである。

Bavant (2006b) は音節初頭の子音群を見るのに語頭の子音群ばかりを調べるのでは不十分である可能性を指摘してゐる\*<sup>3</sup>。実際、çj-, nj- は、語頭に存在しないが、語中で音節初頭音になつてゐる可能性があるものに相當する。

愛稱形成の接尾辭に、-çj-, -nj- (それぞれ男性、女性の愛稱) がある。これらは語幹の第一音節をシンプルな形に刈り込んでから付加される (patr-o 「父」→pa-çj-o 「パパ」、patr-in-o 「母」→pa-nj-o 「ママ」) 特殊な形式である。van Oostendorp (1999) は -çj- の取り扱いに苦しみ paçjo 「パパ」が paço (存在しない語) と對立しない可能性に言及したりした擧げ句、これも残された課題だとしてゐる。議論が中途半端に終はつて、panjo 「ママ」が pano 「パン」と確實に區別されることには言及がないが、van Oostendorp (1999) は音節初頭の子音群の第二要素として j を認めないので、panjo は pan.jo と音節化されると考へることになりさうである。

以上に見たやうに、v や j の關する初頭の子音群については未解決の問題があるが、これらの問題は末子音群の問題と合はせて考へる必要がある。

### 3 語中と語末の子音群について

語末の子音は、コーパス内での出現頻度でいへば、n (en 「～の中で」、min 「私を」), l (al 「～へ」、kial 「なぜ」), r (por 「～のために」、çar 「なぜなら」) といった單子音のあとの順位に、子音群 jn が入つてゐる。子音群の中で最も頻度が高い語末の子音である。音節末子音全體の中でも最頻値を示すことが確實だと考へる。van Oostendorp (1999) の末子音の取り扱いにおいては、わたり音か共鳴音が一つあるか、次のスロットに (実際には「音節外子音」として扱はれるが) 齒莖阻害音が入ると説明される。その他、いくつか込み入つた議論もあるが、全體に、末子音として多くを認めたくないやうである。

\*<sup>3</sup> 理窟としてはその通りであるが、mb, th, dh, lg, zm, vs などが語頭に存在することを阻むものがないといふに至つては、エスペラントの語感を持つ者に廣く支持されるとは思はれない。

van Oostendorp (1999) の、語末母音の削除に關する議論の一部には納得がゆく。エスペラントでは、名詞が單數主格の形式を取るとき場合、語末の *o* が削除されうる。ただし、次末に付與される強勢は、削除前と同じ母音に落ちる。例へば、Esperanto 「エスペラント」、familio 「家族」は、母音が脱落しても Esperant', famili' である。この母音削除は、主として韻文に見られるが、強勢の位置などからもとの形を復元することは困難ではない。このやうな場合、韻文の文法(部分言語の一種 cf. Moskvich (1982)) の中で起こる母音削除を特別扱ひすることに異存はない。語幹末音を廣く音節末音として認めることはできない。韻文スタイルに特有の形式についてはエスペラントの一般的な音節構造とは別に扱ふ立場である。しかし、van Oostendorp (1999) はこの仕組みを複合語の要素間にも適用して、見えない母音を假定する。そのため、音節末子音の多様性は論じられてゐない。

語末の子音群は、かなり單純である。エスペラントの内容語は、ほとんどが「語尾」をもち、名詞なら *-o* (單數主格), *-oj* (複數主格), *-on* (單數對格), *-ojn* (複數對格)、形容詞なら *-a* (單數主格), *-aj* (複數主格), *-an* (單數對格), *-ajn* (複數對格)、相關連體詞なら *-u* (單數主格), *-uj* (複數主格), *-un* (單數對格), *-ujn* (複數對格)、動詞なら *-as* (現在), *-is* (過去), *-os* (未來), *-us* (假定), *-u* (命令), *-i* (不定) と決まつてゐる。ここには末子音は、*-j*, *-jn*, *-n*, *-s* の四種類しかない。また、語尾を持たない數詞、前置詞、接續詞、相關詞や一部副詞などを集めても閉ぢた類の限られたパタンしか見つからない。辭書の見出しを頭から追へば、語頭に見られる初頭の子音群を容易に収集でき、語頭の初頭音は音節の初頭音をかなり網羅できるが、語末の子音群の乏しさは音節末の子音群の乏しさを意味しない。實際には、複合語において、多様な末音が現はれる。そのことは、テキストの電子化が進んだ現代では、少々技術があれば簡単に確認できる。

複合語の語中の子音群の場合、要素間に連結母音が出沒することがある。辭書では連結母音が見られる方を「正しい」語形として提示することが多い。例へば *hejt-o-forn-o* ~ *hejt-forn-o* (暖め-爐) 「ストーブ」の場合、PIV には連結母音の入つた *hejtoforno* を見出しにしてゐる。ところが、コーパス *Tekstaro* を検索すると、連結母音のない *hejtforno* のみが一件現はれる。辭書の示す *serv-o-soldat-o* 「從卒」も、コーパスでは連結母音のない *serv-soldat-o* の方が頻度が高い。複合語や派生語の中には、そもそも辭書に記載がない語も多く出現する。*polv-o-kovr-it-a* ~ *polv-kovr-it-a* 「埃に蔽はれた」などについてはどちらが「正しい」形なのか、辭書の教へるところはない。本稿では、コーパスに實例のある音形である、*-jt*、*-lv* などの末音を認めた場合の末音の體系を提示することにする。

Bavant (2006b) が問題視する *laŭsperte* 「經驗上」と *paŭspapero* 「トレース紙」は語中子音群 *-ŭsp-* に關する音節化の問題であるが、純粹に音韻的な音節がなされれば、個人によつて *-ŭ.sp-* あるいは *-ŭs.p-* と一貫して發音されることもありえなくはないが、おそらく形態意識から *laŭ+spert-e* 「沿 + 經驗-[副詞]」、*paŭ+paper-o* 「透寫 + 紙-[名詞]」の複合語要素境界 (+) に音素境界を置くのが一般的ではなからうか。van Oostendorp (1999) は、*tut+mond-a* 「全世界の」は複合語要素境界に沿つて [*tut.mon.da*] と發音され、[*tu.tmon.da*] にはならないし、*pac+am-a* 「平和を愛する」のやうに後部要素が母音始まりでも [*pac.a.ma*] と發音されるといふが、筆者の觀察でも確かにそのやうな傾向がある。複合語の要素境界は、少なくとも子音群が音節をまたがる場合には、音節境界と一致する

傾向が強く現はれる。

Bavant (2006a, b) は電子化された資料も活用しつつ複合語や派生語の語中を含めた音節末音についても非常に多くのデータを示してをり、評価できる。また、これまで先行研究が示した音節化のシステム自體が多様であり、語中の三子音以上の連続では音節境界は決定できないとして、patro「父」について pa.tro~pat.ro、lingvo「言語」について ling.vo~lin.gvo などの扱ひを紹介する (Bavant 2006b) のも重要な指摘だと考へる。Bavant (2006a) には、47,387 項目に及ぶ辞書 (PIV 2002) の見出し語リスト (複合語、派生語を含む) について音節化の例が示されてゐるが、この中では確實な音節境界と不確實な音節境界を分けて表示してゐる。音節境界の判定は機械的ではあるが、労作であることに間違ひない。ただ、音節境界の不確實性の問題は、實際の個々の話者の示す音節化の多様性の問題であつて、分析の問題ではない可能性が高い。Kalocsay and Waringhien (1980: 41) によると、二子音連続の第二要素が流音であり直前の音節に強勢が落ちるとき母音の長短は一様でないとして、[patro]~[pa:tro] の例などを擧げてゐるが、これは明らかに話者間で音節化が異なることを示してゐる ([pat.ro]~[pa:.tro])\*<sup>4</sup>。音節化が話者間で多様であつても、少なくとも音節初頭にありうる子音群と、音節末にありうる子音群を確定することは可能である。また、彼の言ふ「確實な音節境界」も、さうした有限の子音群の假定があるからこそ提示が可能であつたはずである。

Bavant (2006b) が「分析を單一語幹の語に限つてはならない」といふのはその通りである。ただ、残念ながら、Bavant (2006b) は「音節といふ概念はエスペラントにおいて重要な役割を果たしてゐない」といふ態度を取つてをり、子音群に見られるはずの規則性を見逃してゐるやうに思はれる。子音群、中でもとりわけ末音の觀察、解釋はこれまで十分でなかつた。實際には音の並びのパタンは限られてをり、そこには一定の秩序がある。

#### 4 末子音の體系と介音の下位分類

コーパス (Tekstaro) に出現した語形から、音節と形態素境界をまたがる子音群を精査し、エスペラントの主要な音節末音の組み合はせを整理したものが表 2 である。

表 2 は、見取圖を作るために無理をしたところがある。三子音連続は全て便宜的に入れ込んだもので、それに合はせて -kt は獨自の欄を設けたが、表作成の方針として介音類の別で段を作つてゐるので、一貫性を保つためには子音群第一要素に阻害音が來ることを示す第二段目に配置しても良い。いづれにせよ、全體を見渡す役には立つ。根據となるデータは次の節で示す。

h は音節末に生起した確實な例が認められなかつたが、他の子音は單獨で末音になるやうである。他の子音と一緒に末子音群を構成することがほぼない子音は h のほか ĵzĥ の計四つであつた。興味深いことに、これは初頭子音群の場合よりも少ない。エスペラントの子音は、分布の廣さの點で、末音位置でより大きな子音結合の可能性を持つてゐる。v は子音群第一要素にならないが、單獨で末音になる介音類として最下段に示した。

\*<sup>4</sup> この現象が起こるのは、流音の含まれる子音群のみに關はるものではないと考へる。

表2 エスペラントの主要な音節末音

	W	W	W	G	W	K	(W)	K	K	C	S	(K)
0				dĝgbjz		tkpfĉĥ		k	t	k	s	
K	k									k	s	t
J	j	j	rlmns	j	d	j	t					
	ŭ	ŭ	rlm	ŭ	db	ŭ	tk			ŭ	s	k
R	r	r	mnsv	r	dĝb	r	tkĉp			r	s	t
	l	l	msv	l	d	l	tkpf					
N	n			n	dĝg	n	tkĉ	n	k	t	n	s
	m			m	db	m	p			m	s	
	s					s	tk					
	ŝ					ŝ	t					
	v											

初頭音で見た子音の分類は、末音の説明にも基本的に有効である。阻害音よりも母音の近くに生起する音を介音類としてまとめることができる。s の占める位置が二箇所あることは -sk と -ks の二つの末子音群に象徴的であり、音節のより外側の S 類もそのまま採用できる。ただ、末音の振る舞ひから、わたり音、流音、鼻音等を区別が必要になる。介音類が末音では二つ竝ぶことがあり、その順序が決まってるからである。初頭と異なる點は、介音としての ŭ の存在が確實である點と、s とよく似た分布を示す ŝ が介音位置に現はれる點、そして阻害音より前に v が来る確實な語例が見つからない點である。ひとまづ初頭音の考察から得られた介音類 (W) をわたり音 (J)、流音 (R)、鼻音等介音 (N) に下位分類する。表ではその他、任意の子音を C で示した。

- (5) わたり音 (J)    流音 (R)    鼻音等介音 (N)    有聲、無聲阻害音 (G, K)    S 類  
 jŭ                      lr                      mnsŝv                      bdgzĝĵ, ptkĉĉ                      sŝ

表2 に示した二子音連続の種類は、次のやうに整理できる。

- (6) a. WW: JR, JN, RN (ns, ms を WW 結合と考へるなら、鼻音等介音をさらに區分することになる)  
 b. WG: JG, RG, NG  
 c. WK: JK, RK, NK  
 d. KK (kt のみ)  
 e. CS: KS (ks のみ), WS (ns, ms のほか、表2 に WW 結合として示した js, rs が該當する可能性がある)



末音の場合も、より様々な種類の子音と組み合わせられる分布の廣さを問題にできる。

(7) 末子音群を構成する際の分布の廣さ

- a. 無聲阻害音 (K): t > k > p > c, ç > f > その他
- b. 有聲阻害音 (G): d > b > ĝ > g > その他
- c. 介音 (W): r > l > n > j, ũ, m > s, ŝ > v

阻害音の場合、初頭の子音群と末音の子音群では順序がかなり異なるが、介音については、v を除けばかなり似かよつてゐる。

以上の議論を踏まへて、音節初頭音の體系を改訂したものが表 3 である。

表 3 エスペラントの主要な音節初頭音 (改訂案)

		G	W	K	W	S	W	S	K	W	N	R/J
0		gbdzĝj		kpftchĥê		s		s kptfc				
						ŝ		ŝ kpt				
N	v	g	v	k	v	sŝ	v	s	k	v		
	n	g	n	kp	n	sŝ	n					
	m					sŝ	m					
	s			kp	s							
R	r	gbd	r	kpft	r	ŝ	r	sŝ	kpt	r	v	r
	l	gb	l	kpf	l	sŝ	l	s	kp	l		
J	j			fĉ...	j						mnv	j
	(ũ)			(k	ũ)							

初頭では介音同士の結び付きが NR, NJ に限られてゐる。v は K/G と R/J の間にあるため鼻音の位置に近く、特に奇妙な振舞を見て取る必要はない。

5 音節末の子音群

以下では音節末の子音群を例示する。例示では子音群の見出しを立て、語中の子音群の場合には二子音連続の後に次の音節の頭音までの音列を冒頭に示す。例語 (辞書形に統一しなかつた場合がある) はハイフンで形態素境界を示し、形態素境界に一致しない音節境界はドットで示した。複合語境界に連結母音が出現する變異をもつ場合は末尾に變異を示してある\*5。用例は Tekstaro に現はれるものの中から選び、できるだけ複數件の例が確認できるものを使用するが、補助的に各種辞書見出しやウェブページ検索で確認を取つた。

\*5 變異の提示はあくまで同じ形態素列による同じ「語」が異なる音節化を経る場合があることを示すためのものである。inform-soci-o-j 「情報社會」に對し inform-a soci-o といふ句による對應形があるなどの情報は示してゐない。

## 5.1 音節末三子音連続

複合語前部要素が三子音以上の連続で終わると通常、次の要素との間に母音が介入する。

- (8) a. 四子音: majstr-o-verk-o 「代表作」、dekstr-a-man-ul-o 「右利きの人」  
b. 三子音: membr-o-ŝtat-o-j 「加盟国」、angl-a-ling-a 「英語の」、lingv-o-politik-o 「言語政策」、montr-o-fenestr-o 「ショーウィンドウ」、fingr-o-montr-i 「指差す」、elektr-o-magnet-a-j 「電磁気の」

音節末には三つの子音からなる連続は種類も少なく、頻度も低い。そのためパターンを見極めることは容易ではないし、ひよつとすると三子音連続自體を末音として持たない話者も多いかもしれない。ただ、いくつかの実例からありうる解釈を探っておきたい。

次の例は、三子音連続として認められさうな末音をもつ語例である。

- (9) -ŭsk, -rst, -kst, -nkt  
a. -ŭskn- eŭsk-naci-ism-a 「バスク民族主義の」  
b. -rstf- forst-fak-a 「植林専門の」  
c. -kstm- tekst-mesaĝ-o 「テキストメッセージ」  
d. -nktpr- sankt-proklam-o 「列聖」

コーパス Tekstaro の中では、-ŭsk, -rst, -kst の例は、複合語前部要素の eŭsk-, forst-, tekst- に関わるものしか見つからなかつた。音列 -nkt については、sankt- のほか、punkt- 「点」に関わる複合語があるかもしれないが、複数件の用例が確認できなかつた。

末音 -kst の例が定着するとすれば、S 類の子音のさらに外側にスロットを設定しなければならず、末音のテンプレートが増えることになる。初頭音の配列でも S 類の子音のさらに外側には子音が来ないので、-kst の末音は最も異例なものである。末音 -ŭsk と -rst にも似た問題があるが、これらの場合は介音二つに阻害音が続くパターン (WWK、より正確には JNK と RNK) として認めることができるかもしれない。表 2 で CSK の欄に分類したのは便宜的な扱ひで、末音 -ŭsk と -rst に出てくる s は介音の s と見ておきたい。これらは WWK のパターンに所属するものとして扱ふのである。この問題は二子音連続の解釋にも関わる。-rs, -ls, -js は、RN 結合なのか、RS 結合なのか、配置だけでは判断できない。R 類に s が続く音列を RN 結合と看做して表 2 に示したのは、-ŭsk, -rst の例を WWK (JNK, RNK) 結合と見たためである。

-ŭsk, -rst の例を WWK と見るべき傍證はほかにもある。faŭlt-o 「断層」といふ語幹が複合語前部要素になり、子音始まりの後部要素が続く場合には、末子音群 -ŭlt が現はれることになる。Bavant (2006b) は PIV に立項されてゐる faŭlt-spegul-o 「断層鏡面 (鏡肌)」を例に挙げてゐるが、このやうな実例があればこれが -ŭlt といふ三子音連続末音の例になるであらう。これらの例は PIV にはあるが、文脈のあるテキストには見つからなかつた。-ŭlt が存在するなら WWK のいま一つの例になる。

## 5.2 わたり音を第一要素とする音節末二子音連続

わたり音 j, ũ を第一要素とする音節末子音群には、流音が後続するタイプが存在する。これがわたり音を流音と区別する根拠になる。

### (10) -ül, -ür

- a. -ült- faül.to 「断層」、de.fäül.te 「デフォルトで」
- b. -ürf- laür-foli-o-j 「ローリエ」

### (11) -jl, -jr

- a. -jlê- pajl-âpel-o 「麦藁帽子」 (~pajl-o-âpel-o)
- b. -jlšt- mejl-šton-o 「一里塚、里程標」 (~mejl-o-šton-o)
- c. -jrbr- fajr-brigad-ist-o-j 「消防士」 (~fajr-o-brigad-ist-o-j)

次はわたり音 j, ũ が第一要素で、鼻音等介音が後続するタイプである。

### (12) -üm, -js

- a. -ümv- šaüm-vin-o 「スパークリングワイン」
- b. -jsb- Fejs.buk-o 「Facebook」

次はわたり音 j, ũ が第一要素で、阻害音が後続するタイプである。

### (13) -üd

- a. -üdv- aüd-vid-a-j 「視聴覚の」
- b. -üdk- laüd-kant-o-j 「讃歌」

### (14) -üb

- a. -übt- šraüb-ten-il-o 「ジャッキー」
- b. -übt- šraüb-turn-il-o 「ドライバー」

### (15) -ük

- ük- aük.ci-o 「競賣」

### (16) -üt

- a. -ütl- laüt-leg-i 「朗讀する」
- b. -üt- haüt-kolor-o 「皮膚色」

- (17) -jd
- a. -jdb- rajd-besto 「騎乗用動物」 (～ rajd-o-best-o)
  - b. -jdp- rajd-promen-ad-o 「乗馬散策」

- (18) -jt
- a. -jtl- hejt-lign-o 「薪」 (～ hejt-o-lign-o)
  - b. -jtf- hejt-forn-o 「ストーブ」 (～ hejt-o-forn-o)

Bavant (2006b) は paŭspapero 「トレース紙」を挙げてをり、実例があれば末音 -ŭs を認めることができる。ただ、辞書類を中心に散見されるだけのやうであつた。

### 5.3 流音を第一要素とする音節末二子音連続

流音 r, l を第一要素とする音節末子音群には、鼻音が含まれる。流音と鼻音が異なる位置に現はれることになる。

- (19) -rm
- a. -rms- inform-serv-o-j 「情報サービス」 (～inform-o-serv-oj)、inform-soci-o-j 「情報社会」
  - b. -rmp- inform-pet-o-j 「情報請求」
  - c. -rmĉ- dorm-ĉambro 「寢室」 (～dorm-o-ĉambro)

- (20) -rn
- a. -rnj- modern-jun-stil-a 「現代若年様式的」 (流行語 mojosa 「ナウい」の語源として提示される表現)
  - b. -rnv- etern-valid-a 「恆久的に有効な」

- (21) -lm
- a. -lmr- fulm-rapid-e 「稲妻のやうに速く」 (～fulm-o-rapid-e)
  - b. -lmf- film-festival-o 「映畫祭」

次に示す通り、流音の後に v が來ることから、v は鼻音や介音的 s, ŝ、阻害音と同様に、流音よりあとに位置付けられることが分かる。

- (22) -rv, -lv
- a. -rvs- serv-soldat-o 「從卒」 (～serv-o-soldat-o)
  - b. -lvk- polv-kovrita 「埃に蔽はれた」 (～ polv-o-kovrita)

その他、流音 r, l を第一要素とする音節末子音群に、次のものがある。

- (23) -rs  
a. -rssp- divers-spec-a 「多種の、多種多様な」  
b. -rsgv- kurs-gvid-ant-o 「講習指導者」 ( kurs-o-gvid-ant-o)
- (24) -rd  
a. -rdk- nord-kore-a 「北朝鮮の」  
b. -rdl- hazard-lud-o 「博打」
- (25) -rb  
a. -rbf- arb-fofi-o-j 「木の葉」 ( arb-o-fofi-o-j)  
b. -rbt- sorb-tuk-o-j 「生理用ナプキン (吸収布)」
- (26) -rê  
a. -rêk- serê-kolekt-i 「探し集める」  
b. -rêv- sorê-vort-o 「呪文」
- (27) -rc  
a. -rcr- komerc-rilat-o 「商業の関係」  
b. -rcn- šerc-nom-o 「あだ名」
- (28) -rp  
a. -rpl- harp-lud-ad-o 「ハープ演奏」  
b. -rpg- korp-gard-ist-o 「ボディーガード」 (~korp-o-gard-ist-o)
- (29) -ls  
a. -lsl- fals-lang-ul-o 「嘘つき、毒舌家」  
b. -lsm- vals-muzik-o 「ワルツ音楽」
- (30) -ld  
a. -ldk- bild-kart-o 「繪葉書」 (~ bild-o-kart-o)  
b. -ldf- fald-fofi-o 「(折り畳み式) リーフレット」

- (31) -lt
- a. -ltn- mult-nombr-a-j 「多数の」
  - b. -ltr- alt-rang-ul-o-j 「高官」
- (32) -lk
- a. -lkf- kelk-foj-e 「何度か」
  - b. -lkšt- kalk-štono 「石灰岩」
- (33) -lp
- a. -lpl- help-lingv-o 「補助語」
  - b. -lps- palp-serĉ-i 「手探りで探す」
- (34) -lf
- a. -lfm- Golf-milit-o 「灣岸戦争」
  - b. -lfl- golf-lud-ej-o 「ゴルフ場」

#### 5.4 鼻音等介音を第一要素とする音節末二子音連続

鼻音を第一要素とする音節末の子音群の第二要素は阻害音か S 類音である。鼻音より前にわたり音や流音が来る例はすでに提示した。まづ WK 結合を示す。

- (35) -nd
- a. -ndm- mond-milit-o 「世界大戦」
  - b. -ndp- grand-part-e 「大部分」
  - c. -ndl- land-lim-o 「國境」
- (36) -ng
- a. -ngt- long-temp-e 「長時間」 (~long-a-temp-e)
  - b. -ngr- sang-ruĝ-a 「血のやうに赤い」 (~sang-o-ruĝ-a)
- (37) -nĝ
- a. -nĝkv- ŝanĝ-kvot-o 「變化率」
  - b. -nĝv- inter-ŝanĝ-valor-o 「交換價值」
  - c. -nĝk- oranĝ-kolor-a 「オレンジ色の」、manĝ-kutim-o-j 「食習慣」

- (38) -nt
- a. -nt cent 「百」
  - b. -ntj- pas-int-jar-e 「去年 (副詞)」
  - c. -ntk- pint-kun-ven-o 「首脳會議」
- (39) -nk
- a. -nkh- mank-hav-a 「缺點のある」 (～mank-o-hav-a)
  - b. -nkm- trink-mon-o 「チップ」
- (40) -nc
- a. -ncl- franc-lingv-a 「フランス語の」
  - b. -nck- konkurenc-kapabl-o 「競争力」
- (41) -nê
- a. -nêd- fianê-donac-o 「結納」
  - b. -nê-m- dimanê-maten-e 「日曜の朝に」
  - c. -nêr- tranê-rand-o 「刃」
- (42) -md
- a. -mdl- fremd-lingv-a 「外国語の」
  - b. -mdl- fremd-land-a 「外国の」
- (43) -mb
- a. -mbst- tomb-ston-o-j 「墓石」
  - b. -mbš- bomb-sirm-ej-o 「防空壕」
- (44) -mp
- mpl- temp-lim-o 「期限」、tromp-log-i 「騙して誘惑する」
- 鼻音に s が後続する例 (NS あるいは WW) を次に挙げる。
- (45) -ns
- a. -ns trans 「～を越えて」
  - b. -nsd- trans-don-i 「渡す」
  - c. -nsm- pens-manier-o 「考へ方」

- (46) -ms  
-msp- brems-pedal-o 「ブレーキペダル」

s, š が介音的に現はれる場合は必ず阻害音が後続する。

- (47) -st  
a. -stt- post-tag-mez-e 「午後 (副詞)」  
b. -stn- Krist-nask-o 「クリスマス」

- (48) -sk  
-skf- task-fort-o 「タスクフォース」、risk-faktor-o 「危険因子」

- (49) -št  
a. -štm- pošt-mark-o 「郵便切手」  
b. -štp- vešt-poš-o 「ベストのポケット」

介音的な s, š は阻害音より前の位置にあり、流音に後続する点で、鼻音と似たような位置付けをすることができるが、有聲阻害音と組み合わせることはないやうである。

末音位置で v が阻害音より母音寄り (内側) に生起する実例は見つけられなかつた。ただ、初頭では介音として振る舞ひ、類としては流音より後に位置付けられれば問題ないので、鼻音、介音的 s, š と同様鼻音等介音の括りに入れることができる。初頭音・末音共通の類としては阻害音に位置づける必要がない。

## 5.5 阻害音同士からなる音節末二子音連続

初頭音と同じく、末音でも S 類が阻害音より外側に生起することがある。確實な例には -ks がある。本稿の「類」としては阻害音類の中に S 類音を入れないので、-ks は阻害音 (K) に続き、音節の最も外側に位置する S 類音が現はれる子音群と見ることになる。

- (50) -ks  
a. -ksp- eks-prezid-ant-o 「元議長」、seks-per-fort-o-j 「性暴力」  
b. -ksr- fiks-rigard-i 「凝視する」

末音特有の子音群として破裂音同士の組み合わせの -kt がある。

- (51) -kt  
a. -ktd- kompakt-disk-o 「CD」  
b. -ktm- rekt-metod-a 「直接教授法の」、nokt-mez-o 「夜半」  
c. -ktpl- respekt-plen-a 「尊敬に満ちた」  
d. -ktl- rekt-lini-a 「直線の」



本稿では初頭に破裂音のみからなる子音群を認めなかつたので、末音 -kt に相当する、初頭音における対応は取れないが、pterido 「井之許草」や ktenoforoj 「有櫛動物」の t を介音的破裂音と認めるのであれば、ここにも初頭音位置と末音位置での非対称性を見て取ることができるかもしれない。さうすると、初頭で分布の広い阻害音 k が末音としては介音として現はれ、末音として分布の広い阻害音 t が初頭で介音として現はれることになる。

## 6 をはりに

本稿では、主として複合語の連結部に現はれ、音節をまたがる子音連続の切れ目に注目して、エスペラントの音節初頭と音節末に確實に見られる子音群を確定するための作業を行った。これをもとに、いくつか変異があるにせよ、ありうる音節化のパタンを限定することができる。今後は母音間の単子音や、形態境界のない子音連続、特に語幹末に見られる子音連続と音節化について考察を広げる必要がある。

本研究で得た結論のエッセンスは第 4 節にほぼまとまつて示してある。端的に言へば、v を阻害音類やわたり音類に分類する積極的な根拠は音配列上は認められない。エスペラントでは v は鼻音と同列の介音とするのが優れた見方ではないだらうか。本研究の特徴は、従来音節初頭音を詳細に観察して音節末音をおろそかにしてゐたところ、末音の観察を徹底し、それにより初頭音の體系を見直したところにある。その際、辞書の見出し項目よりは、コーパスにおける頻度を手掛かりとしたことも、初めての試みではないかと考へる。實例は第 5 節にまとめて示した。

本稿の示した子音群は、辞書項目に現はれる音素列を全て説明できるやうにはなつてゐないが、それは實例と出現頻度を参照したため、ある程度の擴張(例へば介音的破裂音の假定)をすれば、少なくとも専門用語の類は説明できるやうな體系を作ることが可能である。試みに、Bavant (2006a) に提示された 47,387 項目を本稿の扱つた子音群の情報から機械的に音節化してみたところ、扱ひに困る音素列をもつ見出しは 150 餘りに過ぎなかつた。そのほとんどが、Allah 「アッラー」、Bhagavadgito 「バガヴァッド・ギーター」、Bjalistoko 「ビャウイストク」、Dnepro 「ドニエプル」、dzeta 「ゼータ」、Finlando 「フィンランド」、Gdansko 「グダニスク」、ghetto 「ゲッター」、Güangdongo 「廣東」、Habsburgoj 「ハプスブルク家」、Lhaso 「ラサ」、Ptolemeo 「プトレマイオス」、senrjuo 「川柳」、Srilanko 「スリランカ」、Tbiliso 「トビリシ」、Tehrano 「テヘラン」、Vladivostoko 「ウラジオストク」、zloto 「ズウォチ」等、定着してゐない外來音として筆者が意圖的に排除した子音群を含むものである。日本語譯に含まれる「ッラ」、「ヴァ」、「ウィ」、「フィ」、「ウォ」などの外來語特有の片假名文字列がなにか象徴的でもある。エスペラントにもどれば、このうち Allah は Alaho、dzeta は zeta の形式も見出しに採用されてをり、不安定な語形である。Allah、dzeta が特異なのは、名詞語尾 -o を缺く點にも現はれてゐる。これらは十分なエスペラント化を経てゐない語形で、「定着してゐない」と考へても大過なからう。

Güangdongo 「廣東」等、中國、朝鮮半島の地名の一部に初頭の介音としての ü が現はれるのは興味深い。v と ü はおそらく、相補分布するイメージをもつて設計された音ではないかと疑はれる。しかし、運用は設計を裏切る(千田 2022c)。v と ü が二つの異なる音

素として使はれ出したとき、それぞれ新たな分布可能性を獲得していったのであろう。

音節構造は韻律システムや前置詞の性質 (Tida 2008)、形容詞の性質 (Tida 2022a) などとともに、エスペラントのヨーロッパ性を示す特徴を持つてゐる (Tida 2022b)。ただ、當然のことながら、エスペラントは、子音群一つとつても、ヨーロッパ性だけでは語り盡くせない、自律的な一つの言語システムをなしてゐる。

## 参考文献

- Bavant, Marc (2006a) Perkomputila silaba analizo de la vortprovizo de PIV 2002. <http://perso.orange.fr/kursoj/studoj/silab.htm>.
- (2006b) Silabo kaj silabado. *Lingva Kritiko* 2006-12-20. <https://lingvakritiko.com/2006/12/20/silabo-kaj-silabado/>. accessed 20240308.
- Brent, Edmund (1973) Marginality and variability in Esperanto. Paper prepared for Seminar 64, Esperanto Language and Literature, 88th Annual Meeting of the Modern Language Association, Chicago, Illinois, (28 Dec 1973).
- Kalocsay, K. and G. Waringhien (1980) *Plena analiza gramatiko de Esperanto*. Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio, kvara tralaborita.
- Moskovich, W. (1982) What is a sublanguage? The notion of sublanguage in modern Soviet linguistics. In Kittredge, Richard and John Lehrberger eds. *Sublanguage: Studies of Language in Restricted Semantic Domains*. 191–205, Berlin: Walter de Gruyter.
- van Oostendorp, Marc (1999) Syllable structure in Esperanto as an instantiation of universal phonology. *Esperantologio* 1, 52–80.
- Tida, Syuntarô (2008) Kial multas lokaj adpozicioj en Esperanto?: Komparo kun la japana, Tok-pisino, Dom kaj aliaj lingvoj. In Lins, Ulrich ed. *Aziaj kontribuoj al esperantologio: Aktoj de la 30-a Esperantologia Konferenco en la 92-a Universala Kongreso de Esperanto, Jokohamo 2007*. 20–32, Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.
- (2022a) Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj. *Esperantologio / Esperanto Studies* 3 (11), 22–54.
- (2022b) 「언어 유형론적으로 본 에스페란토: 그 극단적이고 비알타이적인 교착성」『국어문학』80、1–24、(言語類型論的に見たエスペラント: その極端で非アルタイ的な膠着性).
- 千田俊太郎 (2022c) 「言語の壁を超えた言語の発展」『エスペラント La Revuo Orienta』90 (2)、9–13.

(ちだしゅんたらう、京都大學大学院文學研究科)